

留 学 生 通 信

ベナン共和国 (Benin Republic) を訪ねてみませんか

Benin Republic: a Fantastic Country to Visit



ポヌ ジョジアヌ
PONOU Josiane

■ベナン共和国出身 32歳
 ■主として行っている研究
 ・資源・リサイクル・環境浄化、持続可能なエネルギー技術
 ■通学先
 東京大学工学系研究科システム創成学専攻博士課程2年
 (〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1)

1 はじめに

アフリカ大陸の西側にあるベナン共和国は西アフリカで最も安全で平安な国である。日本の方がよくご存知のナイジェリアとガーナの間にあり、小さな鍵のような形をしている。面積は日本の3分の1ほどで、人口は900万人である。季節は雨季と乾季に別れている。6月～7月は大雨季なので、観光には不向きな季節とされている。

ベナン共和国はフランスの植民地だったため公用語は残念ながらフランス語であるが、ベナン独自の言語が50種類以上ある。ベナンの人々は、日常生活ではベナン語（出身の言葉）を使うが、学校ではベナン語は使わない。教育の場で使われるのは公用語のフランス語である。しかし、言語はその国の文化を伝える根幹となるものなので、私はフランス語を公用語とする方針には大反対である。ようやく政治も言語の重要性を認識し始めたのか、現地の言葉を教育に導入する機運が高まっている。

2 ベナン共和国の特長

ベナンは自然豊かな国である。高い山はなく、暑すぎることもなく、とても過ごしやすい気候である。きれいな海、穏やかな天気、さわやかな緑は、神様の恵みである。

おもてなしの心、思いやり、困っている人々を助ける優しさ、家族を大切にしている心は、ベナンの人々の特徴だ。ベナンで家族と言えば、両親、兄弟だけではなく、親戚皆が一つの家族である。近所の人々も子供の教育に重要な役割を果たしており、子供が立派に育ったときは、家族だけではなく、近所の皆の自慢にもなる。

3 人生の見方

ベナンには「片手では自分自身を洗えない」ということわざがある。誰でも必ず人の助けが必要である、という意味である。ベナンでは、成功は必ず誰かのお陰であると認識する。そのため村の子供の成功を、その村全体の成功と思う人が少なくない。血の繋がりがなくても「私の子です」と言う人も、よく見かける。

結婚は二人だけで完結する事柄ではなく、家族同士が繋がることを意味する。二つの家族が一つになるシンボルが結婚なのである。そのため離婚は簡単には認められない。一緒にいることが嫌になったからといって、簡単に離婚などできないのである。

ベナン共和国は発展途上国なので、お金や仕事がなく困っている人が少なくない。でも、みんな前向きで、明日はよくなると信じている。自殺など誰も考えない。「生きることに疲れてしまった」などと口にしたら「あなた

は変な人ですね」と言われることである。命はあなたが望んでもらったものではなく、神様がくれたもの。そして皆のもの。自殺は罪だと考えられる。この考え方は、日本人がベナン人から学ぶべきことのひとつだと思う。

そんな厳しい生活でも、ベナンの人々は幸せである。お財布にお金が入っていないくても、歌を歌い、踊る。近所の仲間との会話は大事な楽しみの一つである。働いたのに会社の都合でお給料が出ないこともあるが、それでも黙々と仕事を続けるのが普通である。そんなベナン人を、私はとても素敵だと思う。ベナン人にとっていちばん大切なのはお金ではなく、人づき合いなのである。

4 私の恵まれた人生について

自分自身の話をさせていただくと、私は5歳で父親を失った。そのため、7人の未成年の子を持つ母のもとで、困難な幼少期を過ごした。そんなとき、血の繋がりのない、出身地も違う方に、14歳から育ててもらった。私の人生は、その方のお陰で大きく変わった。今、私が日本にいるのは、その方に日本語学校を紹介してもらったことが始まりであった。今の主人にも出会った。

5 私が日本を訪ねたきっかけ

当時ベナンの国立大学アボメカールビ大学の学部3年生だった私は、日本語を無料で学ぶことができることを耳にした。正直に言うと、当時は日本語に興味はなかった。ところが私の育ての親は「日本語を学ぶことで、あなたの将来に新しいチャンスが生まれるに違いない」と助言してくれた。それを聞いて私は、留学生を募集しているという日本語学校を見学しに行った。

その日本語学校は、日本でタレントとして活躍しているゾマホンさんが創った学校で、「たけし日本語学校」と呼ばれている（ゾマホンさんは、日本のTV番組「ここがヘンだよ日本人」に出演したことをきっかけに人気者になり二冊の本を出版。その本の印税を使ってベナンに三つの学校を設立した）。そして私は次の学期、この「たけし日本語学校」に入学することにした。

日本語を学び始めて半年後、思わぬ出来事が起こった。日本への3カ月の短期留学が決まったのである。留学させていただけることになった理由はわからなかったが、私はクラスの中で最も成績が良かった女性のうちの一人だったと、後で聞かされた。そして2004年、立教女子大学に留学した。当時はまだビギナーレベルの日本語力だったが、ホームステイすることになったのである。その3カ月は留学というよりは遊びのようなものであったが、私の人生は大きく変わった。

当時の私は、日本のことを全く知らなかった（日本といえば、サムライ、広島、長崎、というレベルであった）。そんなある日、ホームマザーが私をある科学館に連れて行ってくれた。そこで、廃棄物処理、廃棄物からエネルギーを生産している話を聞いて、私は日本でその勉強をすると決めた。科学館が私の人生を変えたのである。人生、いつ何が起こるかかわからない。毎日自分の可能性を広げるチャンスだと思うべきなのである。

6 私の研究

一般的に、多くの途上国に共通する問題は、食糧と医療だといわれている。しかし私は、その根本にあるのは水の問題だと思っている。ベナンでは「水



図1 no-return gate

400年間の奴隷の歴史を表したノーレタンゲート。一度奴隷としてそのゲートから出たらもう二度とふるさとに戻らない。現在ベナン共和国の歴史のもとになっている。

は命」と言う。きれいな水によって、多くの問題を解決できると信じている。

そのため私の第一の研究は、どこにでもある材料を使って、家庭で使える水処理システムを開発することである。パイナップルの葉、バナナの皮などを処理して、水に含まれている不純物を取り除くシステムを考えている。このシステムを通じて、できるだけ多くの人々の力になることを望んでいる。

第二の研究は、持続可能なエネルギーを作ることである。国が発展を目指すのは、国民に最低限の生活を保障してからだと思う。とはいえ、ベナンの財政は厳しく、国の支援を待っている猶予はない。私たちは自分の力で暮らしを改善したいと願っている。そこで私は、新たなエネルギー源に注目している。あの博物館で見たような、日常生活からの廃棄物の利用、それから、ベナンが恵まれている太陽を利用して電気を作る、といった研究である。

私は、私を育ててくれた父や家族の皆、それから困っている人々の役に立ちたいと願い、研究に励んでいる。